

事象叙述受動文の日中対照研究： 事象構造の観点から

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 陸, 芸娜 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/29497

事象叙述受動文の日中対照研究 ——事象構造の観点から

人間社会環境研究科 人間社会環境学専攻
陸 芸 娜

A Contrastive Research on Passive Sentences for Event Predication between Japanese and Chinese -From the Viewpoint of Event Structure-

LU Yina

要旨

日中両言語における受動文の対照研究は、日本語の直接受動文と間接受動文から出発し、それに対応した中国語受動文のありかたを検討する方向と、中国語の被字句から出発し、それに対応した日本語受動文のありかたについて考察する方向で行われてきた。本稿は、従来の考察方法には以下の2つの問題点が存在すると考える。①必須意味役割を主語とした受動文のみを考察対象としたこと。②単文の受動文のみを考察したこと。

しかし、中国語受動文には非必須意味役割を主語とした受動文が存在している。また、日本語の間接受動文に対応した事象構造を持つ中国語受動文は複文形式で構成されている。したがって、①②の従来の考察方法では、日中両言語の受動文の異同を正確に把握できないと考えられる。以上の2つの問題点を解決するために、本稿は受動文の命題類型理論を援用し、両言語に共通した抽象的な事象構造を図式化し、その事象構造を受動文として言語形式化する方法の違いを解明することを目的とする。以下、上記の手順で考察した結果をまとめる。

日本語受動文においては、主語に「昇格」（本稿では動作主以外の意味役割要素が主語の位置に立つことを「昇格」と呼ぶ）できる要素は①動詞意味フレーム内の必須意味役割要素、②動詞の意味フレーム外の要素、の2種類に限られる。また、原因事象と結果事象の因果関係の緊密性の度合いは日本語受動文の構文に影響を与えない。すなわち、日本語受動文は単語（動詞または複合動詞）レベルで、原因事象と結果事象のイベント抱合を表している。そして、動詞の受動形（一種の複合動詞）の意味特徴によって、受動文主語の指示対象（以下、「受影者」と呼ぶ）に関する変化過程または変化後の結果状態が指し示され、受動文は過程性または状態性という命題性質を持つようになる。

中国語受動文においては、主語に昇格できる要素に、上述した日本語受動文と同一の2種類以外、動詞意味フレーム内の非必須意味役割要素も含まれる。意味役割を担う要素を主語とした受動文を構成するには、受影者の受けた影響（変化過程または変化後の結果状態）を言語形式化する動補構造（動詞＋補語）が常に必要である。すなわち、フレーズレベルで原因事象と結果事象のイベント抱合が表される。動詞の意味フレーム外の要素を主語とした受動文（間接受動文）を構成するには、“这么一……”複文形式が起用され、分句によって原因事象と結果事象がそれぞれ表される。

キーワード

受動文 命題 意味役割要素 事象構造

Abstract

In the contrastive researches in the past, there are two problems left to deal with:① First, only the sentences whose subjects play a necessary semantic role of the verb are under consideration.②Second, only the simple passive sentences are under consideration. We don't think we can realize the differences between Japanese and Chinese passive sentences well with the two problems left. To solve these problems, we draw and analyze the cognitive model, which is a common concept in the two languages, to clarify the formation process of passive sentences.

In the Japanese passive sentences, there are only two types of subjects, one of which is the necessary semantic role for a verb, the other is the element outside the semantic frame of the verb. The event conflation between the cause event and the result event is shown on the word level. The change process of the patient during the event or the state of the patient after the change is suggested by the meaning feature of the verb. Then the sentences own the process character of state character to be as passive sentences.

In the Chinese passive sentences, besides on the necessary semantic role for a verb and the element outside the semantic frame of a verb, non-necessary semantic role for a verb could also be the subject of the passive sentences. When an element inside the semantic frame of the verb is promoted to be the subject, a verb-complement construction is needed to show the change process or the state of the patient after change. The event conflation is shown on the phrase level. When an element outside the semantic frame of the verb is promoted to be the subject, a complex sentence is needed to state the cause and the result separately.

Keyword:

passive sentences, semantic role, semantic frame, event structure

はじめに

事象構造の観点からみると、日本語の場合、間接受動文を除き、受動文の主語に位置するのは常にアクションチェーン本線上にある必須意味役割¹⁾要素であるのに対して、中国語の場合、受動文の主語として、必須意味役割要素以外、非必須意味役割要素も受動文の主語に昇格²⁾しうる。しかし、従来の日中受動文の対照研究ではこれまで非必須意味役割を主語に昇格させる中国語受動文について触れてこなかった。また、単文の受動文のみ考察し、複文形式の中国語受動文の存在が等閑視されてきた。本稿は従来の研究の問題点を解消

するため、両言語の受動文に共通の事象構造を図式化、日中両言語の受動文の事象構造とそれを表す言語形式の異同を考察する。ただし、紙幅の関係上、受動文の二大分類である事象叙述受動文と属性叙述受動文の内、前者についてのみ論じる。

1 理論的前提

1.1 中右(1994)の命題理論——受動文の命題性質
受動文の命題類型について中右(1994: 375)は以下(抜粋)のように述べている:

「受動文には、状態受身(statal passive)か過程受身(processual passive)しかなく、行為受

身 (actional passive) といったものはない。」

中右 (1994) に従えば、受動文は状態命題か過程命題のいずれかでなければならない。本稿はこの理論に基づき、日中受動文の命題特徴 (受け手の変化過程や変化結果) を表す言語形式を分析し、受動文の成立可否を考察する。状態命題の特徴を表す「LOCATION」要素、または過程命題の特徴を表す「SOURCE, GOAL, PATH, DIRECTION」の要素が確認できるかどうかを過程命題、状態命題を構成できるかどうかの鍵となる。

1.2 図式化方法に関する理論的前提:

Langacker (1990) & 中村芳久 (1993)

Langacker (1990) で示されたビリヤードモデルは、物体の移動やエネルギーの伝達を認知的に一般化したモデルである。本稿はそのモデル (図1-1) を援用し、受動文の事象構造を図式化することにする。エネルギー源としての参加者は、意志的に行為連鎖を発動するものである。一方、エネルギーを吸収する参加者は、状態変化または何らかの経験をするのである。このエネルギーの伝達ルートは「アクションチェーン」(action chain) と呼ばれる。図中、参加者を丸で、エネルギーの伝達を二重線の矢印で、参加者の状態変化を波線の矢印で示す。

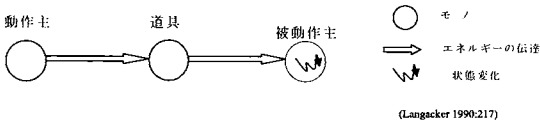


図 1-1

状態変化の図示方法について、Langackerは受け手を表す円の中に状態変化を表す記号を書き足す手法を起用するのに対し、中村 (1993: 249) は以下のようなモデルを提案した。中村 (1993) によると、変化は基本的にはある状態 (時間 t_1) から別の状態 (時間 t_2) への変化として捉えられる。そこで、そのスキーマ的な認知構造はあるモノの初期状態を円、変化の過程を波線の矢印、変化後の状態を四角で表すことを提案した (図1-2)。

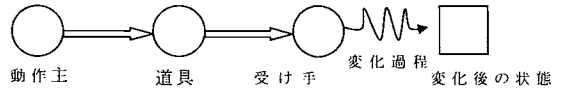


図 1-2

本稿は受動文の命題性質 (過程命題, 状態命題) について論を展開するため、変化の過程と変化後の状態を別々に表す中村 (1993) の認知モデルを引用することにする。

事象を表現するに当たって、動作主と受け手という必須意味役割以外、道具などの要素は常に言語形式化されない。仮に言語形式化されるとしても、よく斜格によって表される。このような区別を反映するために、道具などの要素が位置するエネルギーのルートは動作主、受け手関連のルートと区別視すべきと筆者が考える。そこで、本稿では、動作主と受け手のような必須意味役割の間のエネルギー伝達ルートを「アクションチェーンの本線」とみなす。道具や場所など非必須意味役割要素がエネルギーの影響を受ける場合、そのエネルギー伝達ルートは「アクションチェーンの分岐線」とみなす。ビリヤードモデルを次の図2のように捕らえ直す。

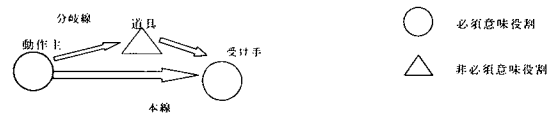


図 2

1.3 辻 幸夫 (2002):

イベント抱合 (event conflation)

2つの事象要素が相互に関連しあってより高次の事象を構成している場合には、それぞれの事象要素に別個の動詞を当てて表現するのが普通だが (例 (1.3-1)), 単一の動詞で表現すること (例 (1.3-2)) も可能である。単一の動詞句に圧縮することで2つの事象要素を高次の事象に一体化させることをイベント抱合という。

(1.3-1) The candle went out because something blew on it

(1. 3-2) The candle blew out.

本稿はこの概念を受動文の考察に援用する。受動文の過程命題または状態命題は下位事象の原因事象と結果事象によって結合される。動作主の動作行為からなる原因事象と受影者³⁾の変化過程や結果状態からなる結果事象がどのように結合し、受動文の命題特徴を維持するのかを分析する。

1.4 日本語の結果述語と中国語の動補構造⁴⁾の指向性

日本語の結果述語は動詞そのものが持つ状態変化の意味を具体化しているものに限られている(影山2001)。本稿は日本語の結果述語について、影山の主張を基に、さらに、以下のような理論補充を行う：他動詞の場合、日本語の結果述語は動詞の受け手の変化を指向するものに限られている。すなわち、結果述語は受け手以外のものを指向することができない(例(1.4-1)を参照)。

- (1.4-1) a. 彼は洋服をきれいに畳んだ。
b. *彼は洋服をへとへとに畳んだ。

一方、中国語の動補構造内の補語の指向性は自由度が極めて高い。無論、中国語の動詞にも、結果が含意されるもの一主体動作・客体変化動詞⁵⁾もあるが、主体動作及び客体変化を表す動詞にも補語を付け、動補構造をなすことが可能である。その場合、補語の意味が優先して前面化される。たとえば、例(1.4-2)において、動作主を指向する補語の“累”の意味が前面化された結果、動詞“疊”が表す動作行為が原因事象としてイベント抱合される。

- (1.4-2) 他 疊 衣服 疊 累了。
彼 たたむ 洋服 たたむ つかれた
(彼は(大量の)洋服を畳んで、疲れた。)

上記の例(1.4-2)から、中国語の動補構造にお

いて、動詞に含意される客体変化の意味より、補語の意味が優先して前面化されることがわかる。動補構造のこのような特性を利用し、動作主と受け手以外の意味役割をプロファイルすることができたと解釈できる。

結論を先に述べると、日本語の結果述語と中国語の動補構造の上記の属性によって、日中両言語の受動文は以下のような特徴を呈している：

日本語受動文を構築する動詞の意味フレーム内の意味役割要素のうち、受動文の主語に昇格するのは受け手及び生産物¹⁾のみである。それに対し、中国語受動文は指向性の自由度が高い動補構造を生かし、各種の意味役割要素を受動文の主語に昇格させることができる。一方、動詞の意味フレーム外の要素を主語とした場合、日本語では単文の間接受動文で表現できるのに対し、中国語では文脈照応で原因事象と結果事象を別々に言語形式化する必要がある。

2 動詞の意味フレーム内の要素を主語とした受動文

2.1 必須意味役割要素を主語とした受動文

2.1.1 中国語の場合

中国語受動文は動作行為によって受け手に起きた変化を表す補語が必要だということは夙に指摘されている。たとえば、

- (2.1-1) 水杯 被压 扁了
コップ 下敷きにされた べたんこ
コップはべたんこにつぶされてしまった。

*水杯 被压了。
コップ 下敷きにされた。

- (2.1-2) 108名 能人 被提 上来了。
108名 実力者 拔擢され あがった
108名の実力者が拔擢された。

- *108名 能人 被提。
- 108名 実力者 抜擢された

な事象構造を図3のように図式化できると考えられる。

- (2.1-3) 木が倒された。
- (2.1-4) 六つばかりの新しい俵が其処へ持ち出された。(CJCS)

「木」、「俵」は「倒す」「持ち出す」の受け手である。日本語の受動文と中国語の受動文との違いは受け手の変化を表す成分は必ずしも主動詞と別に言語形式化される必要がないという点にある。例(2.1-4)において、「其処へ」は受け手「俵」の物理的な移動を表しているが、受動文の成立に必要な不可欠な要素ではない。例(2.1-5)のように、「其処へ」を削除しても、文が成立する。

- (2.1-5) 六つばかりの新しい俵が持ち出された。

中右(1994)の理論によれば、例(2.1-5)には述語動詞の受動形に「受け手が受けた影響による変化過程または結果状態」に関する情報が含まれているはずである。それは以下のような検証で確認できる。

- (2.1-6) 木が倒された。今、木が倒れている。
*木は倒されたが、倒れなかった。
- (2.1-7) 六つばかりの新しい俵が其処へ持ち出された。今、六つの俵が其処にある。
*六つばかりの新しい俵が其処へ持ち出されたが、その六つの俵はまだ元の場所にある。

上記の例から分かるように、「倒す」、「持ち出す」という動詞は受け手が受けた影響による変化も表している。このような意味特徴が含まれているからこそ、(2.1-3)、(2.1-5)において述語動詞と別の言語形式で受け手の変化に関する情報を言語形式化する必要がないのである。

必須意味役割がプロファイルされるのは自然な認知プロセスであるため、話し手は時間軸の自然

例(2.1-1)、(2.1-2)の主語である“水杯”(コップ)と“能人”(実力者)はそれぞれ動作行為を直接に受ける対象になっている。すなわち、アクションチェーンの本線上にあるものがプロファイルされ、主語に昇格し、受動文が構成されたのである。その事象構造の認知モデルは図3のように表す。点線の長方形は認知スコープ、実線の長方形は動詞の意味フレームを表す。例(2.1-1)を例に説明する。受動文を構成する際、状態受身か過程受身という命題性質を維持するために、“圧”(押し付ける)に“扁”(ぺたんこ)と、動詞の直後に補語が付け加えられなければならない。これらの補語は動作行為の影響下の受け手に起きた変化の結果を表している。“扁”(ぺたんこ)という状態が確認できた時点はまさに受け手変化過程の終点(GOAL)である。この状態を[LOCATION]としてクローズアップすれば、状態命題として受動文が構成される。一方、“扁”でない状態から“扁”という状態[GOAL]までのプロセスがクローズアップされれば、この文は過程命題として捕らえることができ、過程受身として受動文が構成される。

上記の2つの例において、動詞“圧”“提”の意味特徴には受け手の変化が含まれていない。受け手の変化を言語形式化するのは“扁了”“上来”という補語である。補語が無ければ文の容認度が低くなる。すなわち、受け手がプロファイルされるのは補語の付加によって結果状態が示されることで実現されたと考えられる。

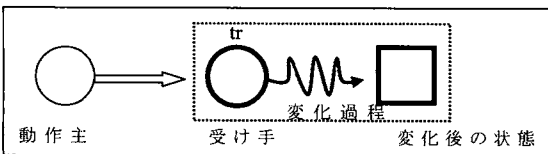


図3

2.1.2 日本語の場合

日本語の典型的な受動文についても、同じよう

な流れに沿って必須意味役割要素としての「木」と「俵」の変化過程または変化後の状態を認知スコープに収めることができる。「木が倒れている」、「俵が其処にある」という状態が確認できる時点は変化過程の[GOAL]である。その時点までのプロセスをクローズアップすれば、過程性が前面化する。受動文において、状態を表すにはさらに「倒されている」「持ち出されている」というアスペクト的手段に頼らなければならない。無論、動詞の特性によって、テイル形が変化過程を表す場合もあるが、ここではそれを考察対象から除く。重要なのは、動詞によって、時間軸上の区切り点が認められることであり、[GOAL]という過程命題の特徴または[LOCATION]という状態命題の特徴が付くようになることである。

以上、中右(1994)の命題理論「受動文は過程命題または状態命題を表す」は、必須意味役割を主語とする受動文が受け手の変化過程または変化後の状態をクローズアップしていることから、少なくとも日中両言語の受動文を的確に定義していることが確認できた。また、中国語において、動作行為の受け手に関する状態変化が補語によって言語形式化されるのに対し、日本語では、受け手の変化が動詞に内包されることを例示した。

2.2 非必須意味役割要素を主語とした受動文

非必須意味役割要素を主語とした日本語受動文は管見の限り存在しない。本節は中国語受動文を中心に考察を行う。以下道具(2.2-1)、場所(2.2-2)、時間(2.2-3)などの非必須意味役割を主語とした中国語受動文を例示する。

- (2.2-1) 菜刀 被 他 切
包丁 ~される 彼 切る
排骨 切 鈍了。
スベアリブ 切る 切れ味が鈍くなった
*包丁が彼にスベアリブを切られて、切れ味が鈍くなった。
彼が包丁でスベアリブを切ったせいで、包丁の切れ味が鈍くなってしまっ

た。

- (2.2-2) 一大群人 聚会 闹了 一整天,
大勢の人 飲み会 騒ぐ まる1日
酒店 都 被他们 喝
居酒屋 さえ 彼らによって 飲む
干了。
干した

*大勢の人が一日パーティーで騒いでいた。居酒屋も彼らに飲まれて酒がなくなった。

大勢の人が飲み会を開き、まる一日騒いでいたから、居酒屋の酒が切れてしまった。

- (2.2-3) 三个小时 就这么 被他
3時間 このように 彼によって
洗衣服 洗 掉了。
洋服を洗濯する 洗濯する 無くなった
*3時間はこうして彼に洋服を洗われて、つぶれてしまった。
彼の洗濯で、三時間も潰されてしまった。

中国語において、非必須意味役割要素を受動文の主語とした場合、その要素を指向する補語の付加によって、当該要素をプロファイルし、受動文を構成することが可能となる。非必須意味役割要素の変化状況を言語形式化することによって、事象に[GOAL]が付けられ、当該要素の変化過程または変化後の状態を確認することができるようになる。日本語の場合、動詞の意味特徴及び結果述語の指向性の制限によって、受け手のみが主語に昇格可能であり、非必須意味役割を主語とする受動文が存在しない。本節は、中国語受動文において、非必須意味役割の道具要素をプロファイルする認知過程に重点をおいて、その受動構文の構成を考察する。

2.2.1 動補構造の必要性

- (2.2-1) 菜刀被他切排骨切钝了。

例(2.2-1)において“切”(切る)という動詞の意味特徴は「刃物などで一続きのものを分離させる」ということである。すなわち、その意味特徴においては切られるものの変化しか言及されていない。“切”という動詞の意味フレームにおいて、典型的にプロファイルされるのは「切る」という行為を行う動作主“他”(彼)とその行為の対象である“排骨”(スペアリブ)である。包丁は切るという行為が行われる際に使用される道具で、その変化は注目されないはずである。しかし、指向性の自由度が高い動補構造“切鈍了”によって、“菜刀”(包丁)の変化がプロファイルされるようになる。

その事象構造は図4のように表す。道具は非必須意味役割であるため、アクションチェーンの本線上のエネルギーではなく、分岐線上のエネルギーを受ける。出来事全体がエネルギー源となり、道具要素の変化を引き起こした。その変化過程を明示するため、フレームの外側に具現化することにした。フレームの外側に変化過程を描くのは、道具要素の変化は出来事全体の発生によるを表すためだ。三角をつなげる点線は「イコール」と意味し、同一道具要素を表している。変化する道具は動詞の意味フレーム内の要素の一つであるということである。

動補構造の役割を以下の2点にまとめる。

- (1) 補語が表す結果は主動詞の意味特徴に内包される受け手の変化結果よりも優先して前面化される。主語の位置にある受影者が道具である場合、補語は道具の状態変化を言語形式化するものが用いられる。例(2.2-1)において、“菜刀”(包丁)の“鈍了”という変化が動補構造“切鈍了”によって言語形式化されており、道具としての“菜刀”がプロファイルされるようになった。
- (2) 図4に示すように、その補語によって、変化過程の[GOAL]がつけられ、受影者“菜刀”(包丁)に関する変化過程を確認することができ、過程受身命題が構成されるわけで

ある。またアクションチェーンの本線と分岐線の事象がともに認知スコープに収められたため、受動文の命題特徴に過程性が前面化したと考えられる。

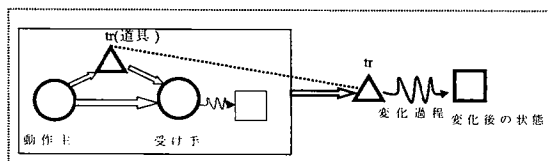


図4

一方、日本語の場合、「切る」に内包されている意味特徴は「切られる対象がばらばらになる、またはパーツが分離する」である。そこで、道具役割としての「包丁」をプロファイルするには、「包丁」の状態変化を表す結果述語の付加が必要であると思われる。しかし、日本語の結果述語は、基本的には、もともと状態変化の意味を持つ動詞とともに用いられ、しかも、その際、結果述語は動詞の意味特徴によって指定された状態の概念を具体的に描写するものでなければならない。すなわち「切る」に内包された意味特徴を具現化する補語(たとえば、「ばらばら」、「細かく」)のみが認められる。道具を指向する補語(「鈍く」など)は認められない。このような結果述語の制限によって、受動文の主語に昇格しうる意味役割要素は受け手のみとなる。

例(2.2-4)では「切る」の意味特徴の制約に反して、道具の包丁を指向する補語「鈍く」が付加されており、「切る」の意味特徴からかけ離れているため、文が容認されない。

(2.2-4) *包丁は切れ味が鈍く切られた。

包丁をプロファイルする場合、主動詞は例えば「使い古す」という動詞に切り替えなければならない。

(2.2-5) 包丁は使い古された。

「包丁」は「使い古す」という動作行為の受け手である。すなわち、原因事象の「使う」ことと結果事象の「古くなるまたは切れ味が鈍くなる」ことのイベント抱合は単語レベルで表される。ただし、主動詞が変わったため、「包丁」は「使う」という動作行為にとって、道具ではなく、受け手である。ここからも、日本語の受動文の主語に昇格しうるのは述語動詞の必須意味役割のみであることが確認できる。

2.2.2 動補構造の受動構文に対する依存関係

中国語の場合、結果補語によって非必須意味役割要素（例えば道具）を主語とした受動文の構成が可能であると論じた。一方、動補構造は受動文に依存する面もある。すなわち、能動形では目的語として非必須意味役割を伴うことができない動補構造は、被字句を構成することによって、それを文法上の目的語として持つことができるようになる。

道具を目的語としてプロファイルする場合、平叙文の能動形（例2.2-6）では容認性が高くない。“把”字句⁵⁾によって、“菜刀”（包丁）を取り立てる場合、文の容認性が高くなる。これは事象構造の認知モデル、及び、非必須意味役割とアクションチェーンの関係によると考えられる。以下、“菜刀被他切排骨切钝了”という文の事象構造を図4から考察することにする。

- (2.2-6) ?他（切排骨）切钝了菜刀。
- (2.2-7) 他把菜刀切钝了。
- (2.2-1) 菜刀被他切排骨切钝了。

「切る」という動詞の意味特徴から読み取れる「変化」はあくまでも「切られるもの」のみである。その意味特徴から道具要素の変化を予期することができないが、補語の付加によって、道具要素が認知スコープに収められるようになる。図4のような認知構造は受け手を主語とする受動文より複雑的で、当認知構造を持つ受動文もより複雑なものになる。道具要素のアクションチェーンに

おける位置づけが明確になるよう、本線（切排骨）と分岐線（切钝了）の事象を同時に言語形式化する必要がある。このような認知プロセスは道具要素の変化及び道具要素のアクションチェーンにおける位置づけによると筆者が考える。道具をトラジェクターとして文を構成した方が認知プロセスに符合すると考える。

上記の考察から、中国語において、動補構造の補語は非必須意味役割要素をプロファイルし、受動構文はその認知プロセスを最終的に言語形式化する手段と考えられる。非必須意味役割を担う要素を主語とする受動文において、動補構造と受動構文は互いに依存していると言える。

動補構造の性質によっては受動文の成立可否が制限されているという観点は夙に指摘されているが、しかし、上記の考察を通じて、動補構造に文法形式上の「一時的な」目的語を伴うことができるようになる。すなわち、動補構造が受動文に依存する場合も存在する——それは非必須意味役割をプロファイルする場合である。能動文の形式では非必須意味役割を目的語として持つことができない動補構造は被字句を構成することによって、文法上の目的語を持つようになる場合もあるということである。非必須意味役割要素を主語とした受動文において、動補構造と受動文は互いに依存していると言える。

これに対して、日本語の結果述語は主動詞の意味特徴によって特定された状態を具体的に描写するものである。他動詞を用いた結果述語が指向するのは動作行為の受け手と決まっている。「切る」に関わる結果述語は切られるものを指向しなければならない。このような制約によって、道具などの非必須意味役割をプロファイルすることが困難になると考えられる。同じ出来事を表すには、動詞を変更することによって、「包丁」を非必須意味役割要素から必須意味役割に変えるしかない。例（2.2-5）の「使い古す」という動作行為に関する事象においてならば、受け手としての「包丁」をプロファイルすることができ、図3のように捉えられる。

2.2.3 アクションチェーン本線上の事象の言語形式化

例(2.2-1)の事象構造において、“菜刀”に起きた変化はアクションチェーンの本線ではなく、分岐線のエネルギー伝達によるものである。このような違いを反映させるために、本線上の事象を言語形式化するのが望ましい。例(2.2-1)において、“切排骨”(スペアリブを切る)という本線事象の言語形式化によって、“排骨”は必須意味役割要素の受け手であり、“菜刀”(包丁)は非必須意味役割の道具であることが明白になる。

“切”という動作行為と“菜刀”というものの間の意味役割関係は一般的な認識では、動作行為と道具の関係であるため、“切排骨”というアクションチェーン本線事象を必ずしも言語形式化する必要がない。

(2.2-8) 菜刀被他切钝了。

包丁は彼(の不注意な扱い)によって、切れ味が鈍くなった。

しかし、動作行為と受影者の間の意味役割関係が不明な場合、アクションチェーン本線事象の言語形式化は必要不可欠である。

(2.2-9) 抹布被他洗灶台洗脏了。

雑巾は彼がコンロを拭いて汚したのだ。

(2.2-10) 抹布被他洗脏了。

雑巾は彼が洗ったが、逆に汚くなった。

“抹布”(雑巾)は“洗”(掃除)という動作行為の道具にもなりうるし、洗うという動作行為の受け手にもなりうる(たとえば、次回また使えるように、清潔を保つために、雑巾を洗うという場面)。

(2.2-9)において、アクションチェーン本線上の事象が“洗灶台”と言語形式化されたため、“抹布”(雑巾)はアクションチェーン分岐線上の非必須意味役割要素であることが明白になり、事象構造が正確的に被字句によって言語形式化さ

れるのである。一方、(2.2-10)のようなシンプルな被字句において、ほかの文脈が無い限り、受動文の主語に位置するもの“抹布”は優先して、受け手として理解されてしまう。

3 動詞の意味フレーム外の要素を主語とした受動文

動詞の意味フレーム外の要素を主語とした受動文といえば、日本語の間接受動文が挙げられる。従来、日本語の間接受動文に対応する中国語受動文は欠けているとされてきたが、本稿は日本語の間接受動文に対応した事象構造を持つ中国語受動文が存在すると主張する。

金沢大学中国語中国文学研究室製作のGPS中日対訳コーパス及び北京日本学研究中心のCJCS対訳コーパスで日本語間接受動文を検索した結果、いずれも対応する中国語表現が能動文になっていたり、直接受動文になっていたりすることが分かった。

以下はコーパスから検索した日本語間接受動文及び対訳の中国語表現である。中国語表現はいずれも能動文になっている。

(3-1) 昔の「お頭」が亡くなったと聞伝えて、下手なものにやって来られては反って迷惑すると、叔父は唯そればかり心配していた。

如果这个往日的“头儿”去世的消息传布开去，过去的属下人跑了来反而会惹出麻烦。叔父一直为这件事担心。

(3-2) 私は「実はそれだけではない、まだみんなに云わなかったが、女房の奴に逃げられてしまっ、……………」と、つい口もとまで出ました。

“其实不仅是这个原因，我还没告诉大家呢，我老婆跑掉了……”这句话不觉之中已经溜到了嘴边。

しかし、これらの日本語間接受動文の事象構造を持つ中国語受動表現がないというわけではない。

(3-3) 如果这个往日的“头儿”去世的消息传布开去，被过去的属下人这么一跑来反而会惹出麻烦。

(3-4) 被老婆这么一跑，我脸面何存啊！
女房に逃げられては、面目なし。

(3-3), (3-4)はいずれも正文の「被字句」である。この二つの文に共通するのは“这么一……”という複文形式が起用されていることである。前節で考察した「動詞の意味フレーム内の要素を主語とした受動文」において、原因事象と結果事象はいずれも動詞の意味フレーム内に生起するのに対し、例文 (3-3), (3-4) において、原因事象は動詞の意味フレーム内で生起し、結果事象は動詞の意味フレーム外で生起する。このような差異を反映するために、動詞の意味フレーム内の要素を主語とした受動文の原因事象と結果事象は動補構造というフレーズレベルでイベント抱合を表すのに対して、動詞の意味フレーム外の要素を主語とした受動文 (3-3), (3-4) において、原因事象と結果事象は複句文の分句によってそれぞれ表される。

例 (3-3) と例 (3-1) を比較すれば、被字句の成立に“这么一”が大きな役割を果たしたことが分かる。“这么”は「こう、このように」，“一”は「～(する)と/～やいなや～」を意味する。

“这么一”によって、意味フレーム内の原因事象と意味フレーム外の結果事象が結び付けられる。これは百科事典的な知識による結びつきである。一方、例 (3-4) は例 (3-2) より、“这么一”が起用されるほか、受影者が受けた影響も「面目なし」と言語形式化されている。実は、(3-1) には受影者が受けた影響を表す言語形式“惹出麻烦”(迷惑する)がもともとと既存な情報であるため、(3-3) において被字句への変換構成には、“这么一”(「こう～(V)たら」)という複文標識の付加

で原因事象と結果事象の関係を前面化するのみで十分なのである。(3-2) にはもともと結果事象が明言されていなかったため、その事象を受動文で表すには (3-4) のように、結果を言語形式化しなければならない。このように、日本語間接受動文に対応した事象構造を持つ中国語受動表現を構成するには“这么一”という複文標識の付加及び受影者が受けた影響の言語形式化が必要である。

以下、間接受動文の事象構造を図式化する。受影者は動詞の意味フレーム外の要素であるため、その受影者の変化過程はあらかじめ、動詞の意味から予測することができない。長方形の中は動詞の意味フレームを表す。受影者は動詞の意味フレームの外側にある三角で示すが、意味フレームの中との結びつきは百科事典的な知識による。受影者は出来事の発生全体を受けていることが図から見て取れる。動詞の意味フレーム外にある要素はフレーム内⁹⁾にある要素より、出来事の影響を受ける確率が小さいと考えられる。長方形の外の受影者がなくても、動作主の行為や運動が成立する。以上のような認知モデルの特徴を反映するために、因果関係は動補構造ではなく、“这么一……”というより複雑な複文形式が起用されたと考えられる。

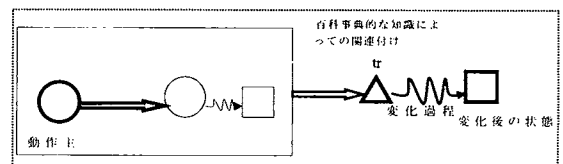


図 5-1 中国語の間接受動文

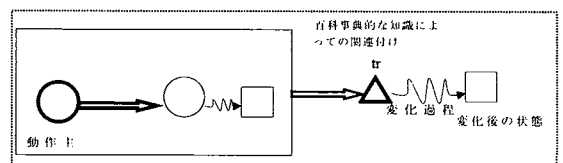


図 5-2 日本語の間接受動文

日本語間接受動文が中国語の間接受動文と共通する点は、受影者が受けた影響が述語動詞の意味特徴によって表されていない点にある。両言語の

異なる点は、受影者が受けた影響を言語形式化する義務があるかないかにある。すなわち、日本語間接受動文では受影者が受けた具体的な影響を別の動詞で言語形式化する義務はなく（図5-2）では、変化後の状態が細線で表される）、潜在的な文脈呼応によって具体的影響を推測できる。一方、中国語では受影者が受けた具体的影響を言語形式化する義務がある（図（5-1）では、変化後の状態が太線で表される）。言語形式化する方法として、単文ではなく、複文の分句を用いて、原因事象と結果事象を分けて表す。

4. 結論

以上の考察を通じ、以下のように結論をつける：

- (1) 日本語受動文の主語は必須意味役割（直接受動文）及び動詞の意味フレーム外の要素という2種類に限られている。動作行為の道具、場所、時間など非必須意味役割要素を主語とした受動文は欠如している。この点においてこそ、日中両言語の受動文体系の真の不均衡が存在すると筆者が考える。

日本語の受動文の原因事象と結果事象は単語レベルで表される。主語の意味役割によって、構文特徴に大きな違いが見られない。日本語受動文において、受け手の変化情報は動詞の意味特徴に内包されることが多い。仮に結果構文が使用される場合でも、動詞に内包される受け手の変化関連の情報を具現化するだけである。よって、日本語の直接受動文は動作行為の受け手（または生産物⁷⁾のみが主語に昇格しうるのである。間接受動文において、受影者が蒙る影響が潜在的な文脈から推測できる場合、それも必ずしも言語形式される必要がない。このように、日本語受動文において、原因事象と結果事象の因果関係の緊密性によって受動文の構文に変化が見えない。

- (2) 一方、中国語の受動文を考察した結論を以

下のようにまとめる：

中国語受動文において、主語に昇格した要素及び述語動詞の間の意味役割関係によって、受動文の構造が異なる。原因事象と結果事象の関連が間接的になればなるほど、受動文が複雑になる。

- a. 動詞の意味フレーム内の要素を主語とする場合：受影者の変化を動補構造によって常に言語形式化する必要がある。

必須意味役割を主語に昇格させる場合、典型的でシンプルな受動文（被字句）が構成される。非必須意味役割（本稿では道具を例に分析）を主語に昇格させる場合、受動文は以下のような特徴が見られる。動補構造の補語は非必須意味役割をプロファイルし、受動文はその変化過程を最終的に言語形式化する。すなわち、動補構造と受動文は互いに依存しているということである。また、受影者が事象構造において非必須意味役割要素であることを明白化するために、アクションチェーン本線上の事象を言語形式化することが望ましい。

- b. 動詞の意味フレーム外の要素が受影者になる場合、受動文の構成はさらに複雑化し、複文の形式が要求される。原因事象と結果事象は文脈呼応で表され、それぞれ複文の分句で言語形式化される。このような複文形式の中国語受動文の存在を明らかにしたことによって、日本語の間接受動文に対応した事象構造を持つ中国語受動文が存在すると言える。

参考文献

[英語文献]

Langacker, Ronald W. 1990 *Concept, image, and Symbol: The Cognitive Basis of Grammar*. Berlin: Mouton de Gruyter

[中国語文献]

陸 儉明 (Lu Jianming) 2004 「有关被动句的几个问题」『汉语学报』, 総第8期, pp. 9-14

李 珊 (Li Shan) 1994 『現代漢語被字句研究』北京大学出版社

馬真, 陸儉明 (Ma Zhen, Lu Jianming) 1997 「形

- 容詞作結果補語状況考察』『漢語学習』1997年1, 4, 6期, pp. 1-5, pp14-18, pp7-9
- 王 燦龍 (Wang Canlong) 2001 「无标记被动句和动词的类」『汉语学习』1998年第5期(総第107期), pp. 15-19
- 張 伯江 (Zang Bojiang) 2001 「被字句和把字句的对称与不对称」『中国語文』2001年第6期(総第285期), pp. 519-524
- [日本語文献]
- Adele E. Goldberg (河上誓作他訳) 2001 『構文文法論—英語構文への認知的アプローチ』研究社
- 侯 精一 (Hou Jingyi) 他 2001 『中国語補語例解』商務印書館
- 黄 春玉 (Huang Chunyu) 2006 「因果関係からみた受動表現一日中対照の立場で」『日中言語対照研究論集』8号2006年5月, pp178-194
- 飯島 美知子 2007 「論説文の訳文から見た受動文の日中対照研究—中国語母語話者への教育の一環として」『早稲田大学日本語教育研究』2007年3月第10号早稲田大学大学院 日本語教育研究科, pp. 17-30
- 影山 太郎 1996 『動詞意味論』くろしお出版
2001 『日英対照 動詞の意味と構文』大修館書店
- 木村 英樹 1981 「被動と『結果』」『日本語と中国語の対照研究』5号, pp. 27-46
- 工藤 真由美 1994 『アスペクト・テンス体系とテキスト』ひつじ書房
- 林 青樺 2009 『現代日本語におけるヴォイスの諸相』くろしお出版
- 益岡 隆志 1986 『命題の文法』くろしお出版, pp. 161-178
1991 「受動表現と主観性」『日本語のヴォイスと他動性』くろしお出版, pp. 105-121
2000 『日本語文法の諸相』くろしお出版
- 中村 芳久 1993 「構文の認知構造ネットワーク—全域的な言語理論を求めて—」『言語学からの眺望』九州大学出版会
- 中右 実 1994 『認知意味論の原理』大修館書店
- 杉村 博文 1981 「『被動と『結果』拾遺』」『日本語と中国語の対照研究』第5号, pp. 58-82
- 辻 幸夫 2002 『認知言語学キーワード事典』研究社
- 山梨 正明 2000 『認知言語学原理』くろしお出版
- 1) 必須意味役割要素と非必須意味役割要素はいずれも動詞の意味フレーム内にある要素である。ともに意味役割を担う点で動詞の意味フレーム外にある要素と区別される。
- 2) 動作主以外の意味役割要素が主語の位置に立つことを「昇格」と呼ぶ
- 3) 受動文主語の指示対象。
- 4) 動補構造とは「動詞述語+補語」という構造をとるフレーズのことを指す。中国語の補語は数が多く、活用範囲が広い。侯精一他(2001:1-6)によれば、補語は七種類に分けられる:
1. 結果補語。例えば、打破(打ち破る)
 2. 方向補語。例えば、拿来(持ってくる)
 3. 可能補語。例えば、去得了(行ける)
 4. 介連補語。例えば、于1934年(1934年に)
 5. 程度補語。例えば、高兴极了(すごくうれしい)
 6. 状態補語。例えば、写得很认真。(まじめに書いてある)
 7. 数量補語。例えば、看过一次(一度見たことがある)
- この七種類の補語の内、本稿が扱うのは1, 2, 4, 7の四種類である。3は動作行為の可能性を表す補語であり、5は形容詞または動詞の程度を表す補語であり、6は動作行為の様態を表す補語である。3, 5, 6はいずれも受動文の過程命題の特徴(SOURCE, PATH, DIRECTION, GOAL), 状態命題(LOCATION)の特徴を表すことができないため、本研究の考察対象外とする
- 5) 工藤(1994)の概念を援用している。
- 6) 紙幅の制限があるため、生産物を主語とする受動文に関する考察を省く。(例: 家が建てられた。)
- 7) 黄(2006:193): 「把」字句が結果事態を招くことを表すということはすでに先行研究に指摘されている。「把」は一般に動作性を強調する構文にはなじまず、結果を表す構文に現れるのがふさわしいと思われる。把字句は被字句と平行的である。両者が違うのは「把」字句は動作主の視点から結果を述べるのに対し、「被」字句は対象の視点から結果を述べるという点にある。
- 8) 動詞の意味フレーム内にある要素は必須意味役割要素の受け手以外、非必須意味役割要素の道具、場所、時間などが挙げられる。
- 9) 生産物は生産性動詞の必須意味役割として、アクションチェーンの本線上の要素である。本稿は紙幅の関係上、生産物について論じないことにする。